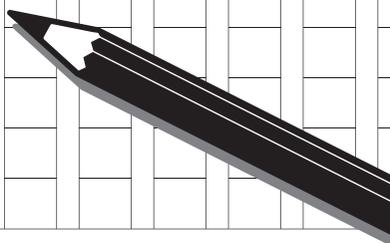


令和2年度

第6回 藤原正彦

エッセイコンクール



入賞作品集



姫路文学館



姫路文学館では、エッセイストとしても人気の高い藤原正彦姫路文学館長（数学者・作家・お茶の水女子大学名誉教授）が「読書」とともに推奨する「書くこと」の大切さを伝えるため、平成二十七年六月に「藤原正彦エッセイコンクール」を創設しました。

本賞は、中学生以上を対象とし、藤原館長の審査により、中学生部門、高校生部門、一般部門の各部門につき最優秀賞、優秀賞、佳作各一作を選考するものです。

第六回目を迎えた今回は、全国から一四二三点の力作が寄せられました。

〈生きることは創ること〉——藤原正彦館長の言葉です。

何気ない日常、出会った人や書物、あるいは孤独や沈黙も、心のどこかに宿り自身をつくり続けているはずです。

このコンクールを通して、多くの方々が、自分を見つめ、考え、文章にする機会を持たれましたら幸いです。

目次

■中学生部門

最優秀賞 「ノクターンの雨」

兵庫県 小林聖心女子学院中学校 三年 大屋莉々花 …… 4

優秀賞 「NY五十二番街」

宮城県仙台二華中学校 三年 菊地 馨 …… 8

佳作 「愛着について」

兵庫県 灘中学校 二年 中 洋貴 …… 12

■高校生部門

最優秀賞 「暗室の蛹カタマタ」

東京都立大学等々力高等学校 二年 青木 望愛 …… 14

優秀賞 「自分の愛し方」

兵庫県立姫路東高等学校 三年 竹内 彩花 …… 18

佳作 「死に前旅行」

兵庫県 小林聖心女子学院高等学校 二年 権 瑞香 …… 22

■一般部門

最優秀賞 「もう一つの生き方」

東京都 狛江市（非常勤講師） 小川かをり …… 26

優秀賞 「水玉もよりのチューブ」

長野県 岡谷市（学芸員） 林 久美子 …… 30

佳作 「天使の水」

愛知県 稲沢市（無職） 菱川 町子 …… 34

■概要

……… 38

第六回 藤原正彦エッセイコンクール 入賞作品集

中学生部門

最優秀賞

兵庫県 小林聖心女子学院中学校 三年

## ノクターンの雨

大屋 莉々花

（あ、やめよう。） そう思ったのは突然で。その日は至って普通だった。重なり合う楽譜の中からショパンのノクターンを引っ張り出し、服を着て、いつも通り左足から靴を履いて、時間より少しだけ早く教室まで来た。ただ、前の時間に習いに来ている小学生の、単調すぎるピアノの音がドアの前まで漏れて、ふと、ああ、やめよう、そう思ったのだ。冬の夕暮れ。その日以降私が教室のドアを叩くことはなく、手提げかばんに入れたノクターンの楽譜は、閉じられたまま眠っている。こうやって私の九年間のピアノ人生は呆気なく終わったのだ。

コロナウイルスの影響で音楽の授業形態が変化した。歌唱中心から、鑑賞へ。広すぎる部屋に一人一人机を離されて授業を受ける様子はどう見ても異様だ。今日はショパンの音楽を聴きましょう、と切り出した先生の眼鏡の縁が蛍光灯の光を反射して、やけに眩しいなど思った。持病の為若くして亡くなったショパンだが、彼の演奏の素晴らしさは驚異的で、どんな技能のあるピアニストでさえ到底敵わなかったらしい。「テストに出ますよ」

という無難かつなんの面白みもない理由でマーカーを引かされた「シヨパン国際コンクール」の文字。このコンクールは、最も相応しいシヨパンの解釈者を選ぶものだと言われた。

私も本気で音楽大学を目指していた時期があったな、なんて回想してみる。あの頃は、どうにかして結果を残そうとただただ必死になっていた。自分がやりたいと思っただけで続けていたはずなのに、いつしかそれがやらなくちゃという強迫観念に変わっていて、軽やかに鼓膜を叩いていたはずのピアノの音に、ある時から息が詰まるような思いがして、鍵盤だけを見つめていたのに、やけに先生の顔色ばかりが気になって。結果を残そうと気張る度、私は音楽の中で眠ることをやめ、鼻歌を歌う回数が減り、自分自身がすり減っていく心地がしていた。

授業形態が変わってからは、一回の授業で先生が選んだ二、三曲のクラシック曲を鑑賞し、その楽曲についての説明を軽く聞く、というのが常だ。しとしとと雨が降り続く日だった。その日の先生の選曲は、シヨパンの「雨だれ」。この楽曲は彼の恋人、ジョルジュ・サンドの存在が大きく関わっている。ある年、シヨパンの病の休養目的でマヨルカ島に長期の旅に出た二人だが、そこで持病が悪化してしまう。ある日、修道院で一人シヨパンを残し、サンドは買い物に出掛ける。しかし嵐が島を襲い、帰りが遅くなってしまふサンド。一人残されたシヨパンは、病に手を震わせながら、恋人の帰りを待ち焦がれ、雨音に心を

馳せて一曲の音楽を完成させた。それが「雨だれ」。

トン、トン、トン、という連続的に続く音が印象的だ。美しい儂さがいっぱいに渋滞する旋律。この連続音が表すのは、シヨパンが修道院で一人聞いた冷たい雨音なのか、恋人と共に聞いた甘く優しい雨音なのか。鬱陶しげに前髪を払った隣の友人をちらりと横目に見ながら、一人ふうん、と声を漏らしては、むわっとした湿気を含む教室の中で、小さな島の恋人たちに想いを馳せる。トン、トン、トン。教室の窓をしきりにノックする雨音と、楽曲の中の連続音が優しく鼓膜を叩いていた。

胸を押し潰されそうな虚無感に耐え切れず全てを手放してしまったあの冬の夕暮れに、この曲を聞いたらどう感じただろうか。ただ切なくつまらない曲だと解釈しただろうか。今の私なら、あの頃の自分に教えてあげようと思う。私が想像しているよりずっと雨だれは優しく甘く、音楽はきつともっと楽しいものだ。先生の顔色なんか窺わずに、ただ音楽を楽しんでほしい。何かを純粹に好きだと思える気持ちは、ひときわ眩しく美しいものだ。と今ならわかる。これから長く続くだろう人生の先では、もう、「好き」という何よりも美しい感情を自分の手で殺さないようにしたい。どんな時も、自分に正直でいたい。雨の日、修道院で一人、病に震えながら恋人を待つシヨパンが、雨音を甘い愛の中で二

人、共に聴いた彼らが、目の前に、いる。トン、トン。雨が教室の窓を叩く。トン、トン、トン。なぜだか無性に息が苦しくなって、誤魔化すように意味のない教科書のページをめくってみるけれど、刹那確かに再び鍵盤に触れることを望んでしまった指先は、その日授業が終わるまで微かに震えていた。

夏、夕暮れ、雨上がり。空の真ん中で白く輝いていた太陽がオレンジ色に傾いて。

(また、いつかピアノを弾いてみるのもいいかな。)

正直さとはなんだろう。自身に問いかければ、もう解っているじゃないかと返事がある。あの日出しそびれたノクターンの楽譜が、再びページを開かれることを、今か、今かと待ち焦がれている。

中学生部門

優秀賞

## NY五十二番街

宮城県仙台二華中学校 三年

菊地 馨

「聴いてみますか。」その年配の男性は一枚のLPを取り出し、微笑みながらこちらを見た。ジャケットの表紙から投げかけられた、トランペットを抱えた男性の鋭い視線の迫りに驚きつつも、小さな声で私は答えた。「お願いします。」

両親の影響で六十年代から八十年代の音楽に親しみながら育った私は、中学に入って出会った同級生によってレコードというものの存在を知った。しかし特定のミュージシャンに夢中になる経験がなかったせいも、その時はレコードに特別な印象は持たなかった。だが次第に、邦楽から洋楽へと興味が移っていき、ある時ビートルズの音楽に目覚めた私は、彼らのアルバムを集めてみたいと強く願うようになり、レコードに対してもムクムクと興味を湧いてきたのである。

そんな時に偶然入った旅先の喫茶店。家族で水戸へ出かけた時の事である。街を隅々まで歩き回ってきたびれ果てた私達は、表通りから一本入った、ひっそりした一角にあるそ

の喫茶店に飛び込んだのだった。

ガラス張りで天井が高く明るい空間。沢山の観葉植物、化粧品や土産物が並べられ、奥は美容室になっている。ちょっと不思議な店である。穏やかな笑みを浮かべた女性に案内されテーブルについた私たちは、ふと横に置かれた棚を見て息を呑んだ。数百枚のLPが、ぎっしりと詰めこまれているではないか。更に見渡してみると、店の隅のほうにいかにも年代物らしいレコードプレーヤーとスピーカーが数台、重厚な黒いボディを鈍く光らせている。私は思わず立ち上がり、吸い寄せられるようにそちらに近づいていった。ただの音響機器という言葉ではとても片付けられない、何という存在感だろう。

その時後ろから、「レコードに興味があるの？」という声がした。振り返ってみると、三人の年配の男性が微笑んでいた。

「はあ。つい最近、興味を持ち始めたばかりなのですが。」どきまぎしながら答えると、「それじゃあ、聴いてみませんか？」

「わあ、ニューヨーク五十二番街ですか。ピリー・ジョエルの名盤中の名盤ですね。」後ろから覗いていた両親が歓声を上げ、二人の男性と熱心に語り合い始めた。けれども私は会話など上の空で、もう一人の男性がレコードを掛ける動作に目を奪われていた。盤を

布でサツと拭き、ご機嫌を窺うように黒い反射面を見やり、優しく、しかし無駄のない素早さでプレーヤーにセットする。その一連の動きは、ボタン一つ押せば鳴りだすデジタル・プレーヤーとは全く異なり、まさに厳粛な儀式であった。

繊細な指使いで、回転する盤上に慎重に針を落とす。ザーと唸る溝の音がまるで舞台が始まる前のような緊張感を漂わせた。談笑していた二人の男性と両親もピタリと口を閉じ、流れ出す音を聞き逃すまいと前傾姿勢をとる。

ジャン。沈黙を破ってエレキ・ギターの威勢のいいリフが巨大なスピーカーを揺るがした。すぐ目の前でバンドが音を震わせ、今にも汗を光らせながらビリーがマイクを持って登場してくるような臨場感。

今まで味わったことのない、どっしりとした厚みのある低音の振動が私の背筋を貫いた。さらりと聞き流すことを許さない音の迫力と生々しさ。まるでコンサートホールの熱狂の中にいるようだ。私は全神経を集中させて一音一音に聴き入っていた。

A面が終わったところで三人の男性は、どうだい、レコードってなかなかいいでしょうと、にやりと目で笑って見せた。

聞けば、彼らは週末毎にこのカフェに集い、店主を交えてレコードを聴いているという。

棚の中のレコードは、それぞれが人生の中で出会い、聴きこんできた思い出の詰まったものだそう。コーヒを片手に豊かな音に耳を傾け、仲間と語り合う憩いの場。なんと愉しげで文化的な一コマなのか。この景色は、音楽を楽しむ時間の理想として私の中に焼き付けられた。

音楽の本質というべきものを教えてくれた彼らに深々と礼をして、私達はカフェを出た。そして高揚した気持ちで帰路についた。

早速、レコードプレーヤーを手に入れた私は、中古レコード店やレコード市に足繁く通うようになった。最員のレコード店の店主や、素晴らしいオーディオのある喫茶店のマスターなど、音楽を通じて多くの人々との繋がりも生まれた。そのきっかけを作ってくれた「ニューヨーク五十二番街」は、今も私の胸の中で鳴り響いている。

さあ、今日もレコードをかけようか。あの男性が見せてくれた儀式を思い出しながら、買ってきたレコードを慎重にプレーヤーの上へセットする。針をそっと下へ落とす。さあ、何が聴こえてくるのか。コーラスか、ギターリフか。期待と緊張の一瞬。

中学生部門

佳作

兵庫県 灘中学校 二年

## 愛着について

中 洋貴

最近紫陽花を育て始めた。祖父の家の大きな紫陽花の木の一部を母がもらってきて、何か僕が育てることになったのだ。今まで生き物を育てたことはほとんどなく、祭りの夜店でもらってきた金魚を育てたことがあるくらいだ。しかもその金魚はもらってきた数日後から親が世話をした。当時の僕はおそらく関心がなかったのだろう。親が言うには四五年は生きたらしいがよく覚えていない。

はじめはすぐに枯れてしまうかなと思っていたが、姉から優しい言葉をかけると綺麗な花が咲くと言われて、どうせ枯らしてしまうならと毎日声をかけてみることにした。当然ながら、植物に声をかけても返事がかえってくるわけがなく、意味があるのかなと疑問に思うこともあった。しかし、毎日顔を合わせていると少しの変化にも気付くようになり、毎日の観察が楽しみになった。ふとした時に気になることもあった。こんな気持ちになったのは初めてだ。小さな花が咲き始め、それがすごく愛おしく感じるのだ。声をかけることによつてすごく愛着が湧いてくるのだと思う。姉から聞いた声をかけると綺麗な花が咲

くようになるというのも、本当は普通のとたいした違いはないが愛着が湧いているからこそ花が咲いたとき、特別綺麗に見えるのだと思う。

親子の関係にも同じようなことが言えるのではないだろうか。女性が子供を産む。しかしその時点ではまだ母親になりきれていないのではないだろうか。赤ちゃんへの愛情を注いで、暑い時にうちわであおいだり、寝ている時にそばにいてあげたりするうちに子供は母親に対し心を開き、また母親も親としての自覚が生まれ成長していくのではないだろうか。植物にそれほど興味がなかった僕が紫陽花を愛おしく思うようになったのと同じように。

世の中には何らかの事情により親と一緒に暮らせない子供もいる。しかし、親でなくてもその子供に愛情と責任を持って接してくれる大人がいれば子供は健全に成長していくのではないだろうか。子供は社会全体で育てるものであり子供に優しい社会であってほしいと強く願う。そうすれば子供が信頼できる大人を獲得し、安心して世界を探索し始めるだろう。優しさのある社会で育った子供は自分を優しく育てた大人と同じように、大人になった時、優しく子供に接することができる。このような良い循環が社会の中に構築されればもっと住みやすい世の中になるのではないかと思う。

僕はこんなことを考えながら今日も綺麗な紫陽花を見つめている。

高校生部門

最優秀賞

暗室の蛹

さなぎ

東京都市大学等々力高等学校 二年

青木 望愛

今日は八月三十日、私の十七回目の誕生日だ。まあ、誕生日だからといって何かが変わる訳ではない。見えている世界が突然変わる訳ではないし、今日の私も昨日の私もほとんど同じように感じる。目が覚めてカーテンを開ければそこには平平たる朝の風景がただ広がっているだけだった。ただ、今回の誕生日にはいつもと違うところがある。それは「十六歳」を超えてしまったところだ。

私は何故だか小さな頃から「十六歳」という年齢に大きな憧れを抱いていた。大人っぽくて、可愛い制服を着てキラキラ輝いていて。「十六歳」はきつと大人の入口なんだろうな、とあの頃の私は夢見ていた。あの扉を開けば私も大人になれるのだとずっと思っていた。去年、十六歳になった時も何だか自分が大人に近づいた気がして嬉しかった。ああ、やっとなんか十六歳になれたと感慨深くなったのを覚えている。

だが、私は自分自身が想像していた「十六歳」にはなれなかった。確かに鏡に映る自分は昔よりもずっと大人びていて、制服姿だって様になっている。高校生らしく部活だって

イベントだって全力で楽しんで、それなりに充実した日々を送ってきた。でも、私は大人の入口に立つどころか大人らしさすら手に入れることはできなかった。精神的にはまだまだ未熟だし、色々なものから自立できていない。もう子供ではないけれど大人になりきれずる訳ではない。あまりにも未完成な自分自身に私は焦りを感じていた。想像していたよりも十六歳の私は、ずっと曖昧なものだった。そうして今日、私は十七歳になった。小さな頃から待ち焦がれていた「十六歳」は思っていたよりも呆気なく過ぎ去ってしまった、また一つ歳を重ねた事で私の思いは変化した。「大人になりたい」から「大人になりたくない」へと。歳をとることは成長の証のはずなのに、喜ぶべき事のはずなのに今日の私はそれを憂いている。

子供でもない、大人でもないニュートラルな存在になってしまった私。よく言えば将来の可能性は無限大、悪く言えば何者にもなれない私。青年期特有の不安定な心情はここからくるのだろうか、だなんて思わず考えてしまう。例えるなら私は蛹。美しい蝶になって羽ばたけるのか、はたまた蛹のまま生涯を終えてしまうのか。それは誰にも分からないし、私にも分からない。ただ、どうなるのかを決めるのは紛れもなく私自身なのだ。その事実が今の私にはあまりにも重荷で、辛くなってしまふ。自然に身を任せて大人になれるのならどんなに楽だろうか。こんなにも胸が苦しくなるのなら大人になんてなりたくない、と

考える事すら放棄したくなる。小さい頃みたいに純粹に大人に憧れる感情なんて私の胸にはもはや残っていない。大人になりたいというよりも早く「何か」になりたい。曖昧すぎる自分が怖くて、ふとした瞬間にいなくなってしまうようで恐ろしい。あまりにも大きすぎる「自由」が徐々に私を蝕んでいく。

正直言つて、どうやったら大人になれるのか今の私にはわからない。もしかしたら明確な方法なんてそもそも存在しないのかもしれない。誰もが悩み、苦しみ、そして乗り越えてきたものなのかもしれない。五年後、十年後の自分が見たら「杞憂だよ」と笑い飛ばせるような将来が待っているのか。はたまたお互いに寄り添う将来が待っているのか。それは今の自分にかかっているというのに私は何もできずに、理想と現実の狭間でただもがき苦しむ事しかできない。ただ混沌とした感情が私の中で蠢いているのだ。この文章のように無秩序な言葉で毒を吐き出す事しかできずに懊悩する。この先の見えない闇には自分以外もいるはずなのに、私には何も見えない。ただ際限のない暗闇が立ち込める部屋に一人、私は取り残されているのだ。扉はあるが開ける鍵がない、そんな部屋に。大人になるという事は、こんなにも孤独で心憂いことなのか。

ねえ、私。十七歳の誕生日おめでとう。貴方は私が望む「何か」になれるのでしょうか。この部屋の鍵を見つけて、大人になることができるのでしょうか。蛹の私は美しい蝶となっ

て世界に溶け込めるのでしょうか。不安しかない未来だけでも今は精一杯の強がり。十七歳の貴方に、将来の私に幸あれ。

高校生部門

優秀賞

兵庫県立姫路東高等学校 三年

## 自分の愛し方

竹内 彩花

私は昔から自分のことが嫌いだった。決断力がないところも、すぐに飽きてしまうところも、あげればきりがないほどに。自分のことを自分が一番見ているからこそ嫌な面も多く気づいてしまう。いつしか心の中で思っていた「あの子は出来ているのに」という言葉がぼつり、ぼつりと口から出るようになっていた。まるで自分で自分の傷をえぐるかのよう

うに。  
そんなある日、私は学校帰りに近くの書店へ立ち寄った。ふわっとかおるインクの匂いと紙の匂い。幼いころからずっと好きな香り。一人で書店に来ては心にびびっと来る一冊を求めて歩いている。

いつものように本の表紙やあらすじを見ていると、横から制服の裾を引っ張られた。驚いて横を見ると小柄なおばさんがいて、

「あそこの本が取りたいけど届かないのよ。よかったらお嬢さんに取っていただきたいの。」

と少し申し訳なさそうに微笑むので、大丈夫ですよと微笑み返し本を手を取った。平均身長より少し高い私が背伸びをして届くようなところにあったその本は見たことない作家さんだった。その帯には、『一度読んでみてほしい、そんな一冊です』と力強い文字がある。そこで私はびびつときた。偶然出会ったこの本は私の何かを変えてくれるかもしれない、そう思った。

「もしかしてお嬢さんその本気に入ったかしら。」

本を見つめる私の顔を楽しそうにのぞき込んだおばあさんに慌てて本を渡すと、首を振って私へ渡した。

「私、あなたにこの本読んでもらいたくなっちゃった。本と出会う前の顔より今の方がとつても素敵よ。」

そう言って私の手をぎゅつと握り、微笑むと去っていった。ほんのり温かくなった心と偶然が生んだ運命の本をもって私は家に帰宅した。

一言で言うならその本は私にとって本当に運命の本だった。はじめは少し堅苦しいような文、入り込みにくいような設定に戸惑い失敗だったか、と肩を落としていた。しかし読んでいくうちに登場人物全員の見方が変わった。彼のすごいところは全員の良いところを話の中で見つけていくところだ。嫌な奴と思っていた人にも、脇役でさえ彼は全員主役と

して捉えていた。私の興奮は読み終わった後も収まらず、彼について調べていると講演会があることを知った。すぐに応募してこの素敵な考え方を実際に聞けるのだとずっとワクワクしていた。

講演会当日、ゆるめのカーディガンを羽織って現れた彼はマイクを握るとゆっくりと語りだした。低くて少ししゃがれた声は、言葉一つ一つを私の中に溶け込ませてくれた。一時間半という講演時間は私にとったら五分かのように感じられたぐらい彼の話は興味深く考えさせられるものばかりであった。

講演会の後、握手と軽い会話をする時間が一人一人に設けられた。何を話そうか、何を聞こうかずっと考えていたのにいざ順番が来ると緊張で頭が真っ白になった。他の人は焦らず出来ているのに。また自分で自分を責めた。憧れの人が前にいるのにこんなことしか考えられない自分がまた嫌になった。

どうしたの、とうつぶさく私に心配そうに声をかけた彼に、私は必死に声を振り絞った。

「どうしたら、自分のことが好きになれますか。」

消えるような声で尋ねた私に彼は少し驚いた顔をした。握手会でこんなことを尋ねる人はいなかっただろう。私ももっと可愛いらしいことを言おうと思っていたのに。また、私なんかというループに入りかけた時彼はぎゅっと私の手を握って言った。

「自分のことを好きでいられないなら、自分のことを好きでいてくれる人を愛しなさい。」

と。そして肩をぽんと叩き大丈夫と呟いた。

私ははじめその言葉が理解できなかった。しかし、彼の本を読んだり年齢を重ねていくうちに気が付いた。私のことを好きな人は私の好きなどころも嫌などころも知った上で好きでいてくれる。つまりその人を愛することはその人が好きな私自身を愛することになると。それに気付いた瞬間、私は静かに涙を流し、自分にそつとごめんね、と呟いた。

そこから私の考えは変わった。正直まだ自分の全てを好きになるのは難しい。嫌などころも日に日に見つかってしまふ。でもそんな時は彼の言葉を思い出して深呼吸をする。そうして自分のことを少し好きになれた。

またいつか彼に会える日が来るだろうか。その日が来たら私は笑って、私が愛した人たちを紹介しよう。

高校生部門

佳作

## 死に前旅行

兵庫県 小林聖心女子学院高等学校 二年

権 瑞香

「死に前旅行についてきてほしい。」

昨年、三月のある日、祖母から電話で突然そう言われた。

婚前旅行や新婚旅行という言葉に聞き覚えはあったが、しにまえ旅行とはいったいなんだらうと、漢字を思い浮かべてはっとした。

しかし祖母は、足腰は多少弱くなっていたものの、体は元気で、物忘れなども特にならない。八十二歳という年齢の割には元氣な祖母が死に前旅行と言ったことに違和感を覚えた。

そして驚くことに、旅行は明後日から一週間で、行先はロシアのモスクワだという。更に、父や母ではなく、私一人について来てほしいと言うのだ。

しかし、私は英語が得意な方ではないし、その時はまだ一人で海外に行ったことがなかった。祖母と二人きりで海外に行くのには不安があった。また、ロシアに旅行に行ったという話を聞いたことがなく、全く未知の危険な場所に踏み入るような気がした。

しかし、祖母が言った死に前旅行という言葉がひっかかり、祖母にしか分からない何かがあるようにも感じて、ついに私は、

「うん。行こう。」  
と返事をした。

旅行当日、私は祖母を案内できるように、短い時間で集めた数冊のガイドブックをカバンに詰めて、祖母と共に飛行機に乗った。ロシアまで、およそ八時間。何度もガイドブックを見直して不安に思いながらも、飛行機に乗る前から楽しそうな祖母の表情を見て、期待をふくらませてもいた。

飛行機が到着したのは夜だった。空港を出ると辺りは真っ暗で、ただ氷点下十度のモスクワの寒さと、足元に雪が積もっているのを感じた。その真っ暗な世界に、

「これがモスクワか。」

ぼつり、祖母が呟いた。

バスでホテルまで向かった。ホテルに着くと、私も祖母も、長旅の疲れからぱたりと眠ってしまった。

翌朝、私が起きると、祖母は既に起きていて、カーテンを開けて、窓の外を眺めていた。起き上がって、窓の方へ向かった。

「わっ！」

思わず声が出た。そこには真っ白な世界が広がっていた。見たことのない景色に驚いた。

祖母は私の様子を見て、笑いながら、

「朝食が済んだら、散歩に行こうか。」  
と言った。

ホテル内で朝食を済ませた後、私たちは、モスクワの雪の中を歩いた。モスクワは小さな街で、歩いているうちに、赤の広場にたどり着き、クレムリンの中に入ったり、聖堂や武器庫を眺めたりした。二人で歩いていると、おとぎの国の中を歩いているような気持ちになり、寒ささえ、素敵だと思った。

長い散歩の途中、祖母が、雪かきがされておらず、特別雪の積もっている広場のような場所をさして、入ろうと言った。そこは、トルストイの家の庭だった。雪の積もった庭を歩きながら、祖母は言った。

「こんな雪を見ると、昔を思い出すわ。」

祖母は、八人兄弟の四女で、冬には雪の積もる田舎町で生まれ育った。祖母から昔の話を知っていたことはあまりないが、幼い時に、二人の姉と、弟を一人、病気で亡くしたことは知っていた。そして、ここ十年の間に、祖母の兄と妹も亡くなっている。

「もうここに来るのも最後になるかね。」  
続けて祖母がそう言ったので、それが不可能に近いことは分かりつつも、

「また来ようよ。」  
と言った。

すると祖母は、

「生きていることが必ずしも幸せではないんですよ。この年になるとね。兄弟もいなくなるし、自分でできないことも増えてくる。」

と、どこか遠くを見つめてそう話した。その姿からは、もう死を受け入れる準備ができて  
いることを感じた。

私は、死を恐ろしいと思う。そして、できればその時を迎えたくないとも思う。

しかし、自分の傍にいた大切な人を失っていき、自分自身もだんだんと体が動かなくなっ  
ていることを感じながら生きることは、祖母にとつて、死より恐ろしいのだ。

私は、生きるということの残酷さに、はじめて気がついた。それと同時に今まで気がつ  
かず、祖母を励ますように「また来ようよ」と言ったことを情けなく思った。祖母にそん  
な励ましは全く必要なかったのだ。

祖母はまた、積もる雪に、足跡をつけながら歩きだした。

私にも死を受け入れられる日が来るだろうか。その時には私も、死に前旅行がしたい。  
そんなことを思いながら、祖母のつけた足跡を辿って、私も歩き始めた。

一般部門

最優秀賞

東京都 狛江市

## もう一つの生き方

小川 かをり (非常勤講師)

土筆が群生する場所は多摩川の土手でさえ数箇所しか見られなくなった。早春になると、待ちかねたようにそこで土筆採りをするのが楽しみだった。数年前からはもう一つの楽しみが加わった。それは普段はめったに会えない友人に会えること。

日当たりの良い土手で土筆を採っていると、むこうの方で手を振る人が見えた。「こっちのほうに土筆が多いからお出で」というのである。そう、「多摩川の佐藤さん」だ。皆、そう呼んでいる。彼の家は多摩川の中洲の木の下にある。立てかけられたダンボールやベニアは多摩川の増水でいともたやすく流される。夏には花火大会があり、必ず年に一度は市の役人が来て立ち退かされる。

「いいんだ、また建てればいいんだから。簡単なんだから」

そう言って佐藤さんは笑う。佐藤さんは中洲の植生を知り尽くしているので、他にもノカンゾウなど、食べられる植物のあるところへ連れて行ってくれる。なんだか食べ物奪っちゃうみたいで遠慮すると、「これはおじさんのものじゃないよ。自然の恵みなんだから、

みんなでいただくね」と持論をぶつ。

佐藤さんの四畳ほどの小さな家には、ぎっしりと捨て猫やら捨て犬やらがひしめいている。佐藤さんには自分のルールがいくつかあって、その中の一つには、自分の食べる分の食料は決して人からもらわないというのがある。こうして自然の恵みをいただくか、さもなければゴミで人々が捨てたものを食べて生きている。食品ロスを減らすためにこうしてホームレスをしているのだから、というのが佐藤さんの主張である。

「だからあんたらも、こうして食べ物を持ってきてくれる分があったら、きちんと考えて自分の食べる分だけを買いなさい。その分、肉にされる動物が殺されているのだからね」  
そう言って佐藤さんは私の差し出した食べ物も決して受け取らない。でも動物の分は喜んで受け取って動物たちに食べさせる。

その動物たちだが、佐藤さんのお家の中でぎゅうぎゅう詰めでおとなしく寝ている。意外に平和でケンカもせず、決まった位置があるのだそう。ストープのすぐ前には子猫を連れた太ったメス猫。ハシッコの方で遠慮がちにしているのは野良犬。外から来て食べ物ももらっては、どこかへ運んでいくのはタヌキやカラス。ノネズミも訪れるという。まるでおとぎ話のような佐藤さんの話が続く。

「多くの人が犬や猫を捨てに来る。しょっちゅうだよ。この家の近くに、まだ目の開かな

いような赤ちゃん猫や赤ちゃん犬を捨てていくんだよ。みんな立派なお家を持っている人だろうに、こんなちっちゃな猫も飼ってやらないんだね。それでおじさんは文句も言わずにみんな引き取っちゃう。いや、おじさんが育てるんじゃなくてね、このホトケがそだてるんさ」

ホトケというのは真ん中のでっかいメス猫のことだそうだ。赤ちゃん猫も赤ちゃん犬でさえ自分の腹に入れて温めてやるらしい。

掘っ立て小屋について調査したいと建築学科の教授が訪ねてきたことがあるという。何でもホームレスハウスをテーマに研究しているとのこと。ホームレスの家の特徴は、多目的空間がすごいところだと先生は語ったという。例えばドアは裏側が収納になっていて、鍋だのお玉だのキッチン用具がぎっしりと貼り付けてある。だからこそ重みがあつて風で飛ばない。照明はなるべく西陽を利用するので西の窓は大きく、照明もある。といつても懐中電燈をレジ袋で覆っただけの照明器具のだが。ストーブは調理コンロにもなり兼用。調理は主に殺菌のために煮ることのみ。調味料は使わない。だから犬猫にも分けてやる。水道は公園の水場まで行くし、トイレもその公共トイレで済ませられる。ホームレスハウスの空間は狭いようであり、心理的には河川敷公園まで広がっているのだ。とまあ、こんな具合らしい。

世の人々は人生の大部分を「何を所有するか？何が所有し足りないか？」という関心事に費やすのではないのだろうか。私も含めてだ。家を買うのに夫婦二人で三十五年ローンだった。家を買って所有するということは、佐藤さんの人生にとつては空白部分だ。そこにはきつと、動物たちとの分かち合いや共生という価値観が入り込むのだろう。

所有とは独り占めするということだ。他者を占め出すということだ。所有ということに佐藤さんは生きる意味を感じないのだろう。我々は買うという行為によって自然の恵みである食料まで独占しておいて、余して捨てたりもする。佐藤さんの生き方はそのおかしさを鋭く指摘しているようにも思えて、私はなんだか話していると落ち着かない。当たり前前だと思ってきた価値観が暮らしごと揺さぶられるのだ。

一般部門

優秀賞

長野県 岡谷市

## 水玉もよりのチューブ

林 久美子（学芸員）

手についた機械油を石けんで洗っていると、泡の匂いが、四十年前の記憶を呼び醒ました。

あの頃、私は部活動に明け暮れる中学生で、田んぼの中の一本道を自転車で通学していた。家は兼業農家で、会社勤めの父が夕方になると通学路途中の田んぼで農作業をしていた。

自転車でさあっと過ぎれば爽やかな道も、その日は、たちこめる草いきれに覆われた気の重い帰り道で、というの私は学校からずっと自転車を押して帰ってきた。

三キ口は歩いただろうか、うちの田んぼのところで、父がちょうど畦草を刈っていた。

「今帰りか。どうしたんや。パンクしたんか？」

「そう、タイヤがペチャンコや」

「ちよつと待つてろ。乗せて帰ってやるから」

私はセーラー服のまま、刈ったばかりの緑臭い畦に座って父が終わるのを待つていた。

少しすると父は、私のパンクした自転車をひよいと担いで、軽トラックの荷台に載せた。

「紐が無いけのお、自転車がガタガタ揺れて落ちんように、お前が載って押さえとけよ」

「え？乗るの後ろ？アタシ、スカートやん」

「ははは、そんなこと気にせんでいい。自転車が、歪んで壊れる方がおおごとや」

有無言わず軽トラの荷台に積まれた私は、スカートと自転車を押さえて、その変な格好に笑えたけれど、夏の終わりの夕焼けは赤かった。そして家に着いたら、父は農作業姿のまま自転車のパンク修理をしてくれた。

翌日、チェーンにも油をさしてもらったので、自転車はとても滑らかで絶好調だった。

だけどもた、帰りには私の自転車はパンクしていた。父もまた田んぼで作業していて、汗だくで自転車を押す私の姿を見つけると、

「今日もパンクか？待ってる、一緒に帰る」

と言った。私は昨日と同じように軽トラの荷台に積まれて夕焼け空を眺めたけれど、笑いよりも込み上げて来る別の思いがあった。

「これは、パンクさせられたのかも・・・」

しかし、そう思っても確信が無かった。

家に着くと、父は無言のまま自転車のパンク修理を始めた。私は何も言わなかった。セーラー服のまま、重苦しい空気の中で、うつむいて作業する父の農作業帽の汗ジミをただ見

つめていた。父は汚れた手で、洗面器の中に黒い自転車チューブを入れて、小さな泡がプクプク出ているのを見ながらつぶやいた。

「・・・お前、見ているだけなら、自分でパンク修理してみるか。教えてやるから」

「・・・出来るかな。難しそうやん」

「そんなことはない。パンクは直せばいいことや。こんなことは、何てことは無い」

その時から、私は父からパンク修理の仕方を教わった。タイヤから上手くチューブを外すこと、水に沈めて穴の箇所を見つけること、穴のあいた箇所に貼るゴムは、切り口を斜めにして段差が出ないようにすること、しっかりと接着するように木槌で叩くこと、などなど。そしてパンク修理が終わると、自転車の油で汚れた自分の手を石けんで洗う。

パンクはその後何度か続いた。私は、パンク理由に思い当たる節はあっても、何も言わなかった。その度に自転車を押して帰ることを何度繰り返しただろう。雨の日もあった。もう父の力を借りずに自分でパンクが直せるようになった時、父が言った。

「ほお。上手くなったな。これでもう大丈夫や。何もこわいことはありません。自転車屋も顔負けや。歩いた分はトレーニングやな」

「うん。相当やったんやもん。タイヤのチューブが、貼った丸いゴムで水玉や」

稲刈り後の父と二人で、大きな声で笑った。

後日、私は見た。部活動でレギュラー争いをしていた人たちが、何人かで私の自転車に押しピンを刺していたのを。

「なにをするの！陰でこそそせんで、言いたいことがあるなら、ハッキリ言えばいい！」  
胸と脚が震えながら言ったのを覚えている。

自分で修理してみて分かる。自転車には小さなパンク穴がいくつもあいていた。こんな穴は自然ではなく、押しピンか何かで故意的に刺さなければ出来ない。父はきつと、一番初めにパンク修理したときに気付いたはず。誰かがやつてることも分かったはずだ。でも、父は私に何も言わなかった。何も聞かなかった。そのかわり、私に技術を授けて、立ち向かい方と勇気を与えてくれた。

今、父は、八十を過ぎて痴呆が始まっている。娘である私のことを分からない時もある。

「お父さん、昔、自転車パンクした時に、パンク修理教えてくれたことあったよね」

「お？そうやったかのお」

「私の修理、上手いって言ってくれたやん」

「そうか？よお分からんが、パンクは直せばいいことや。そんなことは何てことはない」

「そうやね、何てことはないね」

同じことを言ってくれた父は白髪になって、昔より頼りなげに笑う。

一般部門

佳作

愛知県 稲沢市

## 天使の水

菱川 町子（無職）

たった一度会っただけなのに、そしてもう二度と会うことはないのに、七十六年の時の流れの中で忘れられない出会いがある。

モンゴルの冬は厳しい。日中でも、マイナス二十度を超す日が続く。日本中がゴールデンウィークに浮かれ、新緑鮮やかな季節を謳歌している時、モンゴルの人々はようやく訪れた春の兆しを求め、まだ雪が残る草原に繰り出す。七十一歳にしてモンゴルで二年間の大学進学予備コースを終え、終了記念のピクニックを迎えたのはそんな穏やかな春の日だった。酷寒の冬を耐えた大地には春を迎えた喜びで命のエネルギーがあふれている。人々はそのエネルギーを浴びるために大人は勿論のこと大学生、中・高校生、果ては小学生に至るまでどっと繰り出す。

マイクロバスで現地に着くと、花見さながらの風景がくりひろげられていた。古い寺院への道をあえぎながら登っていくと、後からあとからちびっこ達のはしゃぎながら追い抜いて行く。芽吹いたばかりの木や草の萌えたつようなエネルギーと子供らの命のエネル

ギーが溶け合つて、花は咲いていないのになぜか心が華やぐ。草原に腰を下ろすと地面から伝わる暖かさは大地に抱かれているようだ。同級生や教師がお菓子やジュースでくつろいでいる時、私は木の茂った場所を探した。みんなから離れていて私の姿が見えない場所でリンベを吹くためだ。リンベとはモンゴルの民族楽器で、日本の横笛に似ている。

モンゴル語の習得と並んでリンベの音色に魅せられてモンゴルに住む事を決めた。しかしまだ人前で吹くほどの腕前ではないので、人のいない場所で密かに一人だけの演奏会を開いている。今回はかなり木々が生い茂った格好の場所を見つけたことができた。モンゴルの民謡、日本の北国の春などレパートリーを思いつくまま吹いていく。気持ちよく吹いていたその時だった。後ろでカサコソと音がするので振り向いたら、十歳くらいのおかっぱ頭の女の子三人と目が合った。リンベの音に誘われて来たらしい。興味津々の目でまっすぐに私を見ている。私を驚かせないようにそつと来たのか、全く気づかなかつた。吹くのをやめるともつと吹いてという身振りをした。そのまっすぐな瞳に促されて断ることができず、三人の可愛い聴衆の前で生まれて初めてのコンサートとなった。まずは私の十八番、「ロミオとジュリエット」。甘く切ないメロディーが幼い心に響いたのだろうか、拍手までもらえた。続けて三曲ほど披露すると、一人が持っていたミネラルウォーターの入ったペットボトルをそつと差し出した。

「えっ、これ、私にくれるの？ どうして？」

と聞くと

「きれいだから・・・」

と恥ずかしそうに言った。つまり私のリンベの音に感動し、何か御礼をしたいのだけれど何も無い。たまたま手に持っていたペットボトルをお礼としてあげたいというのだろう。私のリンベが幼い純な心を動かすほどの力があつたという事が信じられなかった。やがて集合時間がせまったのか小さなおかつぱ頭は走り去っていった。ペットボトルを持つまま思いがけない出会いに呆然と突っ立っていると、今度はクラスの友達と先生らしい人がどやどやと現れた。美しいリンベの音を友達や先生に聞かせたくて連れてきたのだろうか。クラスのみんなにトトロの「散歩」を披露すると笑顔で曲にあわせて手拍子をしてくれた。音楽は初めて出会った異国の子どもとこんなにも心を通わせることができるのだ。リンベが引き合わせてくれたこの出会いを、私は一生忘れることはないだろう。

思えばこのリンベはモンゴルで日本語教師をした時、学生との出会いが忘れがたく記念に買い求めたものだ。一曲だけ吹けるようになるつもりで教えを請うたのに、先生の美しい音色に魅せられ十年も続けてしまった。先生は、初心者の方が外国人であることも、六十歳をはるかに超えていることも妥協せず、いい加減な演奏は許さなかった。誠実で凛

とした教え方だった。日本語を学ぶ若者、リンベの先生、そして今日の女の子。心に残る忘れがたい出会いの輪が巡り巡ってペットボトルの水になった。神様が心ときめく出会いの付録に天使の水をプレゼントしてくれたのだろうか。家に帰ってからその水でコーヒートを淹れ、可愛い聴衆の顔を思い浮かべながら至福の時を過ごした。

人の一生の中では、人生を変えるような感動的な出会いもあるだろう。しかし今日は日本人の私と、名前も知らないモンゴル人の幼い女の子達との、ほんのひと時の出会いだった。雨上がりに空を見上げたら思いがけず虹を見て心が和んだような、夜空をなにげなく見上げたら、流れ星に心が弾んだようなそんな出会いだった。

# 令和2年度 第6回 藤原正彦エッセイコンクール 概 要

## ■ 審査員

藤原正彦 姫路文学館長（数学者・作家・お茶の水女子大学名誉教授）

## プロフィール

昭和18年旧満州生まれ。新田次郎・藤原てい夫妻の次男。  
東京大学理学部数学科卒業、同大学院修士課程修了。理学博士（東京大学）。  
コロラド大学助教授、お茶の水女子大学理学部教授を歴任。  
昭和53年『若き数学者のアメリカ』で日本エッセイスト・クラブ賞、平成22年『名著講義』で文藝春秋読者賞を受賞、平成26年『孤愁』でロドリゲス通事賞を受賞。  
そのほか、『国家の品格』『天才の栄光と挫折』『国家と教養』など著書多数。  
平成26年4月、姫路文学館長に就任。近著に『本屋を守れ』。

## ■ 作品規定

対象は中学生以上、テーマは自由、400字詰め原稿用紙5枚以内。  
日本語で書かれた自作で、未発表のものに限る。令和2年9月15日締め切り。

## ■ 賞

「中学生部門」「高校生部門」「一般部門」ごとに〈最優秀賞〉〈優秀賞〉〈佳作〉各1編。  
賞状、藤原正彦館長のサイン入り著書と副賞の賞金（中学生・高校生は図書カード）を贈呈。

## ■ 応募状況 … 応募総数 1,423点

部門別	応募数	兵庫県内			他府県	海外
		姫路市内	姫路市外	県合計		
中学生部門	64点	16	38	54	10	0
高校生部門	605点	343	242	585	20	0
一般部門	754点	62	88	150	601	3
合計	1,423点	421	368	789	631	3

中学生部門：市外では、高砂市、宝塚市、芦屋市、神戸市、奈良県、大阪府、東京都、宮城県から応募があった。

学校応募（学校として作品をとりまとめて応募）は8校であった。

個人応募は13人であった。

高校生部門：県外では、北海道、東京都、山梨県、埼玉県、新潟県、岡山県から応募があった。

学校応募（学校として作品をとりまとめて応募）は8校であった。

個人応募は15人であった。

一般部門：10代から90代まで各世代から応募があり、そのうち60代以上が過半数を占めた。

他府県からは、沖縄県を除いてすべての県から複数の応募があった。

海外からの応募者3人は、マレーシア、イタリア、ドイツ在住者である。

## ■ 表彰式

日時：令和3年1月23日（土）午後1時30分～3時

会場：姫路文学館 講堂（北館3階）



第6回 藤原正彦エッセイコンクール  
入賞作品集

---

編集・発行 姫路文学館  
〒670-0021 兵庫県姫路市山野井町84番地  
TEL (079) 293-8228

---

令和3年(2021年)1月23日発行